**H29年度京都工芸繊維大学繊維科学センター補助事業研究報告会に出席しての所感**

'18.3.16ﾍﾞﾝﾁｬｰﾗﾊﾞﾄﾘｰﾗｳﾝｼﾞにて、中村成臣C43卒

配布資料に、「本学繊維科学センターは、本学が蓄積してきた繊維科学・工学分野での研究と教育の実績を引き継ぎ、発展させる事業の展開により　①新繊維科学・工学体系を確立して、深みのある繊維文化の醸成に寄与　②本学の多くの研究者の連携を促進して、繊維素材の一層の高機能化と新機能開発　を主な目的とする。その目的達成の一環として補助事業「プロジェクト研究」があり、今回、その対象研究発表の場である。」とあった。参加はとくに制約がなく、同窓にも案内をいただいた。はじめての参加であった。

感じたことを以下に述べる。

1. 発表は、基礎的な構造解析、作用機構メカニズムの理論化に主眼がおかれ、より実用的意味付けや新機能付加への展望、そのへんの必要プロセスに関する説明が少なかったような気がする。もちろん限られた時間で、多くの研究アプローチの中から、何を報告するか、難しい面もあろうし、学生や研究関係者を想定対象にした発表会かもしれない。しかし、理論的アプローチは、開発研究には不可欠であっても、そこから得られる新機能や付加価値展開の可能性を確認するための手段である。本センターのみならず、本学の特徴とせねばならない点は、工学的展開や応用拡大などの実用的意義の探索であるはず。ならば、それらの点を、自信をもってはっきりさせ、発表できる段階になったものと、途中段階のものと、その区分が発表時にわかるようになっていると、一般的部外者にはありがたかった。
2. 科学の応用拡大や工学的展開の視点から考えると、「美術工芸資料館蔵染織関連からみる幕末明治期の欧州産プリント裂事情」は聴きごたえがあった。とくに、過去の染織資料のプリントや捺染技術の科学的分析調査、画像解析による織構造の判別調査など、現存繊維資料に新しい解釈や視点を提供する意味で大きな学問的意味があるように思えたこと、さらに、芸術的文化的価値を持つ繊維造形遺産を、その芸術的価値や意義を、科学的分析的な知見を加え、整理して後世に残すことは、文化遺産の保存とともに、一般人への啓蒙活動として、大きな意義があるように思えた。京都の有形・無形の文化遺産を毀損することなく保存し、次代へ継承していくプロジェクトとして、「京都・文化遺産アーカイブプロジェクト」が、2014年に発足したらしいが、その一環にも加わり体系化してほしい。
3. また、大学が持つ広く啓蒙活動の視点からいうと、「次世代スマートテキスタイルの創造と標準化」の発表は、テキスタイルの現状レビューであり、分かりやすく、大変ありがたかった。ただ、モノづくりの点では、中国や韓国、東南アジアにおけるトレンドも聞きたかった。確かに、最近、繊維業界の話題は、ファッション動向として、主マーケットである欧米を取り上げられるのはよくわかる。しかし、モノづくりや素材に関連する日本の繊維業界のわれわれの立場からすると、その製造拠点の情報もぜひ聞きたい。欧米マーケット情報がそのまま反映した動きをしているのか、その点も確認したい気がした。また、その動向をリードする、国や機関も知りたかった。
4. 本学はグローバル化を目指して久しい。また、すでに学内には海外からの留学生や研究生が、学内構成員のかなりの割合になっていると聞く。にもかかわらず、研究発表は日本語であった。もちろん、スライドや資料は英語が多く使われているが、グローバル化に対応した研究発表という雰囲気ではない。また、参加者は全員日本人で、学内にいる多くの外国からの研究者や学生が認められなかった。とくに、開発途上国で繊維産業を、今なお基幹産業として発展させていかねばならない国からも、多くの留学生が学びに来ているはずである。にも拘わらず、その姿が見えないのは寂しい。

５．本センターがさらに、大学が「GO OUT & NETWORK」する拠点になってほしい。同窓も支援したい。